# 奈良・飛鳥東垣内遺跡

1　所在地　奈良県高市郡明日香村大字飛鳥字東垣内

2　調査期間　一九九九年（平11）二月～三月

3　発掘機関　明日香村教育委員会

4　調査担当者　西光慎治

5　遺跡の種類　溝跡

6　遺跡の年代　飛鳥時代～平安時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

飛鳥東垣内遺跡は、飛鳥池遺跡の北約二〇〇ｍの所に位置し、飛鳥寺推定東面大垣のすぐ東側にあたる。今回、ポケットパーク建設に伴い、発掘調査を実施した。その結果、幅九・八ｍ深さ一・二ｍの南北溝を検出した。この溝は飛鳥池東方遺跡でも見つかっており、今回検出したのはその下流にあたる。溝の時期は大きくＡ～Ｃの三時期に分かれ、Ａ期は七世紀中頃の素掘溝、

（吉野山）

Ｂ期は七世紀後半で西岸は護岸を行なっている。護岸は花崗岩を積んで、杭で固定したもので、一部に凝灰岩・細粒砂岩も含まれている。Ｃ期は八世紀前半で、花崗岩の自然石を乱雑に積み上げたものである。溝幅は、時期が下るにつれて狭まっていくことも確認した。

報告する木簡はＡ期の溝底から出土している。また溝内からは大量の瓦・須恵器・土師器・漆付着土器とともに、「元寺」や「大」と記された墨書土器も出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　〔廿荷カ〕
□□　(128)×(9)×2　081

(2)　□　(167)×(19)×3　081

(1)は、右辺は原形を保っているが上下は折損、左辺も割れている。文字は中央で半截されているため判読は難しいが、「廿荷」とも読める。内容は不明である。(2)は、左辺は原形を保っているが、右辺、上下は欠損している。文字は偏の部分（ギョウニンベン）が残るのみである。

なお、木簡の釈読にあたっては奈良国立文化財研究所の寺崎保広氏のご教示を得た。

（西光慎治）